

令和 3 年 5 月 31 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K10002

研究課題名(和文) 医学生・臨床研修医の「物語能力」教育プログラム開発のための調査研究

研究課題名(英文) Survey and research for the development of an educational program on "narrative competence" for medical students and clinical residents

研究代表者

小比賀 美香子 (OBIKA, MIKAKO)

岡山大学・医歯薬学総合研究科・講師

研究者番号：00610924

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：「物語能力(narrative competence)」は、「病の物語を認識し、吸収し、解釈し、物語に動かされて行動するための能力」と定義され、「ナラティブ・メディスン(Narrative Medicine: NM)」は物語能力を通じて実践される医療である。本研究で、「精密読解」「パラレルチャート」などを用いて、「物語能力」教育を実施したところ、「疾患 Disease」中心の卒前教育において、「病い Illness」の視点を学ぶ機会を提供することができ、自己省察、ふり返りにもつながり、臨床実習全体を通じての取り組みの効果も期待された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

医学教育において、医学生は、高学年になるにつれてヒューマニティや患者への共感性が低下し、医療の科学的側面ばかりに関心が向く傾向があるといわれ、近年、態度教育やプロフェッショナリズム教育の重要性が論じられるようになった。本研究で、「物語能力」教育を実施したところ、「疾患 Disease」中心の卒前教育において、「病い Illness」の視点を学ぶ機会を提供することができ、自己省察、ふり返りにもつながり、臨床実習全体を通じての取り組みの効果も期待された。さらなる発展により、より人間味ある医療の実践に繋がる可能性がある。

研究成果の概要(英文)：Narrative competence is defined as "the ability to recognize, absorb, and interpret the narrative of illness, and to act on the narrative. Narrative Medicine (NM) is a medical specialty practiced through narrative competence. In this study, we conducted "Narrative Competence" education using "Close Reading" and "Parallel Chart", etc., which provided an opportunity to learn the perspective of "Illness" in pre-graduate education focusing on "Disease". It was also expected to be effective throughout the clinical training.

研究分野：医学教育

キーワード：物語能力 医学教育

1. 研究開始当初の背景

- 1991年、Guyattらにより、「科学的根拠に基づく医療 (Evidence Based Medicine: EBM)」が提唱されて以来(1)、EBMは世界の医療の主流をなしている。EBMは、「個々の患者のケアに関わる意志を決定するために、最新かつ最良の根拠(エビデンス)を、一貫性を持って明示的な態度で、思慮深く用いること」と定義される。1998年にGreenhalghらが提唱した、「物語と対話に基づく医療 (Narrative Based Medicine: NBM)」は(2)、「患者が主観的に体験する物語を全面的に尊重し、医療者と患者との対話を通じて、新しい物語を共同構成していくことを重視する医療」と定義される。
- EBMとNBMは「患者中心の医療」を実践するための「車の両輪」に例えられ、高齢化社会を迎えた本邦では、NBMの重要性がより増しているが、EBMの普及に比べ、NBMの実践手法、教育手法は十分に認識されておらず、研究報告も少ない。
- 医学教育において、医学生は、高学年になるにつれてヒューマニティや患者への共感性が低下し、医療の科学的側面ばかりに関心が向く傾向があり(3)、臨床研修医については、平山らが、1～2年目の経年変化での共感性の低下を報告するなど(4)、これまでの知識・技術偏重への反省から、近年、態度教育やプロフェッショナルイズム教育の重要性が論じられるようになった。
- プロフェッショナルイズム教育として、本邦を含め様々な取り組みが報告されているが、米国のCharonは医師がもつべき基本的能力として、「物語能力(narrative competence)」を、「病の物語を認識し、吸収し、解釈し、物語に動かされて行動するための能力」と定義した。物語能力を通じて実践される医療を「ナラティブ・メディスン(Narrative Medicine: NM)」と提唱、その育成のための教育として、「精密読解」「積極的傾聴」「省察的記述」「パラレルチャート」などの手法を提唱、実践し、一定の教育成果を報告している(5)。ナラティブ・メディスンの主要概念は、「Attention(注目・配慮)」「Representation(表現)」「Affiliation(関係構築・つながり)」の3つである。(図1) 図1 ナラティブ・メディスン
- 本邦では、NBMやNMの教育手法として、「物語能力」教育プログラムを卒前・卒後の医学教育に導入し、検証・評価し、どのような要因が医学生、臨床研修医の「物語能力」に寄与するかを詳細に解析した報告はない



- (1) Guyatt GH. "Evidence-based medicine", ACP Journal Club, 114: A-16.1991
- (2) Greenhalgh T et al. "Narrative Based Medicine: Dialogue and Disclosure in Clinical Practice. BMJ Books, London, 1998
- (3) Pedersen R. Empathy development in medical education - A critical review. Med Teach. 32 (7) :593-600. 2010
- (4) 平山陽示ら「JSPE日本語版による医学生・研修医の共感性評価-第2報(経年変化) (会議録)」(医学教育 45 巻 Suppl. 181, 2014)
- (5) Charon R. "Narrative Medicine: Honoring the Stories of Illness" Oxford University Press, 2006

2. 研究の目的

- 医学生、臨床研修医の「物語能力」育成を促進する要因、阻害する要因を明らかにする。
- 医学生、臨床研修医の「物語能力」はどのように育成されるのか、その過程を明らかにする。
- 本邦での医学生、臨床研修医の「物語能力」教育プログラム開発に必要な要素は何か、解析する。

3. 研究の方法

(1) 研究参加者

- 医学生：岡山大学病院総合内科クリニカルクラークシップで実習する5~6年生。
- 臨床研修医：総合内科で数ヶ月研修を行う1~2年目の臨床研修医。
実習、研修中は、「精密読解」「パラレルチャート」などを用いて、「物語能力」教育を実施する。

(2) 医学生、および臨床研修医へのアンケート・インタビュー調査

- アンケート調査：実習、研修終了時に、全員に自記式アンケート調査を行う。内容は、実習、研修に対する満足度やプログラム評価を含み、量的評価を行う。1年後、2年後に、事後アンケートをメールで送付、回収し、量的手法で経時的に解析する。
- インタビュー調査：実習、研修終了時に非構造化インタビュー(グループ面接)を行う。「実習、研修を通じて考えたこと」「患者さんの物語で印象に残ったこと、気づき」「自分の内面に生じた考え」などについて問う。

(3) 「パラレルチャート」の解析

- 医学部5年生は2週間の実習中に、1名の病棟患者を担当、外来実習では毎日1~2名の患者を担当する。臨床研修医は、数ヶ月の研修中、計約10名の病棟患者の担当医となり、外来研修では毎日1~2名の患者を担当する。
- 医学生、臨床研修医は、毎日A4 1枚程度でパラレルチャートを記載し、指導医と共有する。パラレルチャートの内容は、医学生、臨床研修医の「物語能力」はどのように育成されるのか、その過程を明らかにすることを目的に解析を行う。

4. 研究成果

(1) ナラティブトレーニング合同練習

対象：医学部5-6年生2-4名、薬学部4年生1-2人

時間：2時間×2回の計4時間

目標：注目・表現のトレーニング

1. 病の体験を「物語」として考える 2. ことばを使って「意味」を考える

内容：

< 1回目 > ・導入：20分 ・写真を見る+共有：10分 ・絵を見る+作文：30分

・共有30分 ・まとめ：30分

< 2回目 > ・シナリオ紹介：5分 ・読解+作文：40分 ・作文の共有：30分

・ディスカッション：30分 ・まとめ：15分

●学生の作文抜粋

「たわむれ」

いちめんの闇

むせかえるほどあかるく

我ゆく先にたちのぼる

うかぶ雲

あるく私ほかにいくものはなく

かれらは我のまわりにおちる

よそみをするとも あるくとも

ゆきつくさきは みなおなじ

さすれば我はたわむれん

光と闇と この雲と

●アンケート結果

<良かった点>

自分の気持ちや内面に目を向ける機会は少ないが、その機会を得ることができた。

一つの題材に対し、少数の人数であっても、様々な捉え方があったことがわかった。

他学部と合同で行ったところ。(ある程度知らない者同士がやりやすい)

臨床実習で患者さんに接する機会も増えた6年生という時期

特に予習を必要とせず、誰でも参加できること。

今までdiseaseばかり教えられてきたがillnessの大切さを教えてくれた。

<改善点>

書籍の解釈は題材の選択が重要と思った。難しかった。

時間が足りなかった

時間が長かった

実習を通じて参加者がどのくらい能力向上したか客観的に計れる指標があれば効果を示しやすいと感じた。

<感想(抜粋)>

同じ写真、絵、物語を見ても人それぞれそれらに対する考え方が異なることを実感できた。この経験から1人1人の患者さんと向き合う時も、個々人の想いや考えを大切にできる医師になりたい。

普段病棟では患者さんの話を聞いてばかりなので、自分も誰かに話す必要があると感じた。

(2)パラレルチャート

目標：注目・表現・関係構築のトレーニング

- ・患者さんとのやり取りを通じて、患者さんの多様なバックグラウンドに触れる。
- ・患者さんの気持ちを考えると同時に、自分の気持ちもふり返る。

内容：

- ・担当患者さんについて、以下を毎日記載する。
 - 患者さんの気持ちに思いを馳せ、文章で表現する
 - 自分の気持ちもふり返る。そして文章で表現する。
- ・毎週木曜日にメールで指導医に送付。
- ・週1回、指導医によるフィードバックを受ける(メールあるいは面談)。

●パラレルチャート(抜粋)

(学生) 今日患者さんと他愛のない話をしていたのですが、ふと患者さんが2日後の手術への不安を話してくださいました。手術しなくても薬で良くなるんじゃないかと仰っていて、それでも手術しなければいけないんですかと涙ぐんでしまいました。患者さんと1対1でお話しているときに涙を見せられたのは初めてだったので内心かなり戸惑いましたが、なんとか平常心で不安に寄り添うにはどうしたらいいか考えました。結局あまりいいことは言えなかったのですが、手術が終わって元気になった さんをまた見に行きますとだけ言って病室を後にしました。ただ、今回の患者さんの場合、医学的には明らかに手術が必要な状況ということでしたが、患者さんにとっては何事もなくあと数年生きれば十分とおっしゃられていて、手術の合併症で声が出せなくなるかもしれないということもあり、手術をしたくないという患者さんの気持ちもわかるような気がしました。医学的に正しいことが患者さんにとって本当にいいことかどうかは僕らにはわからないのではないかと思います。ただ、僕は医学的に正しいことを信じて治療しなければならない。そのギャップをどう埋めていくかということがこれから先僕の課題になっていくと思いました。

(指導医) とても深い省察ですね、、「医学的に正しいことが患者さんにとって本当にいいことかどうかは僕らにはわからないのではないかと思います。」医師は常に「患者さんにとって」何がベストなのか、常に考える必要があるのだと思います。医師は常に謙虚に、真摯に、その患者さんにとっての幸せは何なのか、患者さんと一緒に悩んで悩んで、、答えがクリアにならなくても、その中で患者さんに寄り添い続けたいものです。。

●アンケート結果

- ・普通のカルテのみだと、自分の気持ちや患者さんの気持ちをついつい忘れてしまいがちだが、一度言語化することで強く印象に残り、無機質な医療が人間味のあるものになると思う。
- ・どのように役立つかは明確には言えないが、より患者さん、自分自身と向き合うことができ、そこで学んだことを、次に活かしていけるのが良いとおもう。
- ・感じたことや思ったことで治療に関係ないことはスルーするようにしていたので、改めて書くことでストレスが減った気がした。
- ・思っていた以上に自分が患者さんのことで喜んだり、傷ついたりしているということに気づいた。自分自身のことでクリアにとらえきれていないものだということが分かった。
- ・注意深く観察するように心がけるようになって初めて、患者さんの視線や表情から想像以上に多くのことが分かることに気づいた。

(3)考察

<医学部におけるナラティブ教育実践の報告例>

	対象	内容	特徴	課題
鶴岡ら	医学部4年生 (地域医療学・ 総合診療部の 臨床実習)	90分の小グループ実習： 1. イントロダクション 2. EBM/NBMを合わせたシ ナリオ症例でディスカッ ション 3. ふり返りと解説	<ul style="list-style-type: none">物語の重要性の認識臨床知識、スキルの総 括の手助け気づきと想像力の活性 化	<ul style="list-style-type: none">評価方法シナリオ作成EBM/NBMに精通した 教育者育成
宮田ら	医学部4年生 (臨床入門)	3時間/日×5日間 1. NBM概論、映画教育 2. 臨床実践講義 3. 患者の病いの語り聴講 4. 3分析 5. Significant Event Analysis演習、パラレル チャート作成模擬演習な ど	<ul style="list-style-type: none">患者を全体として診るこ と、患者の物語を尊重 して医療を実践すること を理解ふり返りを通じた深い洞 察	<ul style="list-style-type: none">実際の臨床現場に出て いない段階での患者の 想い、考えを想像するこ との限界継続的教育の必要性
北ら	医学部5年生 (総合診療部の 臨床実習)	1. 外来での臨床経験を題材 に、学生・患者の視点から 掌編小説を書く 2. 共有してディスカッション	<ul style="list-style-type: none">自己の経験を様々な視 点から振り返る自己の物語を相対化	<ul style="list-style-type: none">生物医学的検討と心 理社会的検討のバラ ンス

Japanese Journal of N: Narrative and Care, No1, Jan. 2010

<本研究>

	対象	内容	特徴	課題
本研究	医学部5-6年 生 (総合内科 選択実習)	1. ナラティブトレーニング合 同実習 2. パラレルチャート	<ul style="list-style-type: none">他学部合同でより多様な 視点に触れることができる実際の担当患者さんとのや り取りを通して、自己をふり 返り、省察する実習中の学生の心理的ケ アにもつながる	<ul style="list-style-type: none">評価方法指導者育成消極的な学生への対応

物語能力に着目した教育は、「疾患 Disease」中心の卒前教育において、「病い Illness」の視点を学ぶ機会を提供することができ、自己省察、ふり返りにもつながり、臨床実習全体を通じての取り組みの効果も期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 小比賀美香子	4. 巻 N/A
2. 論文標題 ナラティブ・コンピテンス（物語能力）に注目した医学教育	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本英文学会 第91回大会（2019年度）Proceedings	6. 最初と最後の頁 N/A
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yoshito Nishimura, Tomoko Miyoshi, Mikako Obika, Hiroko Ogawa, Hitomi Kataoka and Fumio Otsuka	4. 巻 10
2. 論文標題 Factors related to burnout in resident physicians in Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 International Journal of Medical Education	6. 最初と最後の頁 129-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 皆川冬樹 古川真 小比賀美香子 西田健朗	4. 巻 6
2. 論文標題 【シンポジウム】糖尿病医療学の知の蓄積～学会および地方会活動より～	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本糖尿病医療学学会誌～病いの語りをケアする～	6. 最初と最後の頁 33-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小比賀美香子	4. 巻 6
2. 論文標題 NRS20点の痛みを訴えられる線維筋痛症の女性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本糖尿病医療学学会誌～病いの語りをケアする～	6. 最初と最後の頁 73-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小比賀 美香子、奥田 恭士、奥 聡一郎、寺西 雅之	4. 巻 -
2. 論文標題 文学は医療に貢献できるか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 JAIIA第7回全国大会報告プロシーディングス	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小比賀美香子・片岡仁美・佐藤明香・小川弘子・三好智子・大塚文男	4. 巻 49
2. 論文標題 物語能力 (narrative competence) に注目した取り組み	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 医学教育	6. 最初と最後の頁 140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yamamoto A, Obika M, Mandai Y, Murakami T, Miyoshi T, Ino H, Kataoka H, Otsuka F	4. 巻 19
2. 論文標題 Effects on postgraduate-year-I residents of simulation-based learning compared to traditional lecture-style education led by postgraduate-year-II residents: a pilot study.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 BMC Med Educ	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s12909-019-1509-y	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 小比賀美香子
2. 発表標題 NRS20点の痛みを訴えられる線維筋痛症の女性
3. 学会等名 第6回日本糖尿病医療学学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小比賀美香子
2. 発表標題 糖尿病医療学の知の蓄積～学会および地方会活動より～
3. 学会等名 第6回日本糖尿病医療学学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小比賀美香子
2. 発表標題 大学病院の女性医師として考える医師の働き方改革
3. 学会等名 第19回日本病院総合診療医学会学術総会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazuki Tokumasu, Mikako Obka, Haruo Obara, Makoto Kikukawa, Fumio Otsuka
2. 発表標題 How do residents develop self-efficacy through clinical training? A qualitative study
3. 学会等名 AMEE 2019 An International Association For Medical Education
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村上拓 山本晃 万代康弘 三好智子 伊野英男 片岡仁美 小比賀美香子 大塚文男
2. 発表標題 研修医に対するシミュレーション教育の救急当直時における効果についての研究
3. 学会等名 第51回日本医学教育学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazuki Tokumasu, Puthiery Va, Haruo Obara, Lisa Rucker, Mikako Obika, Fumio Otsuka
2. 発表標題 Reflections from the patients' point of view: a comparison between United States and Japan
3. 学会等名 第51回日本医学教育学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ko Harada, Satoshi Hirohata, Mikako Obika, Fumio Otsuka
2. 発表標題 Interdisciplinary study tour in Myanmar: What can Japanese students learn from developing countries?
3. 学会等名 第51回日本医学教育学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小比賀美香子
2. 発表標題 シンポジウム第12部門 文学を通じた「実践」教育
3. 学会等名 日本英文学会第91回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小比賀美香子・片岡仁美・佐藤明香・小川弘子・三好智子・大塚文男
2. 発表標題 物語能力 (narrative competence) に注目した取り組み
3. 学会等名 第50回日本医学教育学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小比賀美香子
2. 発表標題 同世代、同性患者との関わりを通して、感じたこと～Aさんを通して見る自分自身～
3. 学会等名 第5回日本糖尿病医療学学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	片岡 仁美 (KATAOKA HITOMI) (20420490)	岡山大学・大学病院・教授 (15301)	
研究分担者	三好 智子 (MIYOSHI TOMOKO) (40444674)	岡山大学・医歯薬学総合研究科・准教授 (15301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------